

# 漢語動詞の二格構文に関する誤用調査

—中国人日本語学習者を対象に—

張 善実

キーワード 漢語動詞、二格、ヲ格、意味役割、誤用

## 1. はじめに

中国語母語話者が日本語の漢語動詞（「漢語＋する」）構文を使用する際に、自他の誤用が多いことがしばしば指摘されている。特に漢語動詞のとり二格をヲ格に間違えやすいとされている。以下は、その誤用例である。（（ ）内は正しい用法）

(1) 来週の見学旅行を（→に）参加したいけれども、ゼミの発表があって本当に残念だ。＜市川（1997）より＞

(2) 一人でたばこを吸ってほかの人を（→に）影響しないとはまだ。でも公共の場所でたばこを吸うのは犯罪だと思う。＜国研（2001）より＞

本研究は、中国人日本語学習者が日本語の漢語動詞の二格構文を習得する際に、どのような動詞の場合に誤用が生じやすく、どのような動詞の場合に誤用が生じにくいのか、それは母語の影響とどのようにかかわっているのかについてアンケート調査を実施し考察を行ったものである。本研究では漢語動詞の二格をヲ格に間違えた例を中心に考察する。<sup>1)</sup>

## 2. 先行研究及び問題点

二格とヲ格の使い分けについて取り扱っている先行研究には生田・久保田（1997）、杉本（1997）などがある。

生田・久保田（1997）は、国際交流基金日本語教育センターの研修生（日本語上級学習者／被験者の母語は様々）50名に対して、穴埋め式の客観テストを出題し、格助詞の意味役割ごとの誤用傾向について考察している。その結果、「対象を表す機能について、助詞ヲの過剰一般化が起こっている」（例：「規則を違反する」など）と指摘している。当研究は、格助詞の意味役割を細分化し、

習得上の問題点をその意味役割ごとに考察している。

一方、杉本（1997）は、1995-1996年の茨城大学の日本語クラスの学習者のうち、中国語を母語とする学習者30名（中級レベルから上級レベル）の誤用を分類・分析している。当論文は格助詞の誤用について、＜着点＞の二格の代わりにヲ格を使った誤用（例：「一日往復の観光ツアーを参加して…」「奨学金を応募した」）及び＜対象＞の二格の代わりにヲ格を使った誤用（「他人の権利を影響する」「病気を抵抗する」）が圧倒的に多いこと、また、＜場所＞やく＜起点＞など具体的に捉えやすい機能では誤用が起きにくく、表す範囲が広く抽象的なく＜着点＞やく＜対象＞などで誤用が頻繁に起きていると論じている。「参加する」「応募する」の誤用の理由について杉本は、中国語では“参加+旅游”のように「動詞+目的語」という他動詞表現となるため、日本語でも「ヲ目的語+他動詞」と考えたための誤用であると推測している。一方、「影響する」「抵抗する」などの動詞の誤用について、動作の対象は一般にヲ格で表わされることからヲ格を使ったものと考えられるとしている。

以上の先行研究では、学習者の格助詞の使用は＜対象＞及び＜着点＞を表す意味役割に誤用が多いという傾向が指摘されている。しかし、いずれの研究もそれ以上の考察をしていない。また、杉本は「参加する」「応募する」は中国語の母語の影響を受けて二格をヲ格に間違えたと推測しているが、その根拠については言及していない。

上述した問題点を踏まえ、本研究では中国人日本語学習者を対象に、漢語動詞の二格構文の使用実態を意味役割別に検証した。その結果、二格をヲ格に間違えた割合が大きいものから順に＜態度の向かう対象＞（例：～に干渉する／～に反対する）、「その他」（例：～に感染する／～に精通する／～に影響する／～に違反する）、＜移動の帰着点＞（例：～に移民する／～に加入する）、＜変化の結果＞（例：～に変色する／～に分裂する）、＜成就判断の基準＞（例：～に失敗する／～に合格する）、＜一方的行為の対象＞（例：～に自首する／～に投資する）、＜存在の場所＞（例：～に隠居する／～に分布する）であることが明らかとなった。

### 3. 調査の概要

#### 3.1 本調査の目的

本調査では、中国人学習者を対象に、二格をとる漢語動詞の使用について調べ、正用と誤用の傾向を探り、その原因を分析する。具体的に以下の4点につ

いて考察する。

- ① 二格をとる漢語動詞文の意味役割別の正答率を見る。
- ② 誤答の場合どのような格助詞を選んだかを見る。
- ③ 意味役割別に中国語ではどのような構文に相当するのを見る。
- ④ どのような動詞の場合に誤用が生じやすく、どのような動詞の場合に誤用が生じにくいのかを見る。

### 3. 2 本調査の被験者

本調査は2006年10月から11月にかけて中国国内の大学で行った。調査の対象は重慶大学、大連遼寧師範大学、大連交通大学で日本語を専攻する大学生173名である。被験者はすべて大学一年生から日本語を学習しており、中国語を母語とする学習者に限定した。173名の被験者の内訳は以下のようである。

- ①重慶大学：2年生33名、3年生21名、4年生17名
- ②大連遼寧師範大学：3年生38名、4年生17名
- ③大連交通大学：2年生29名、3年生18名

### 3. 3 調査方法

本調査は二格をとる漢語動詞を二格の意味役割により以下の9種類に分類した(各意味役割の定義は4節で述べる)。このうち、⑦、⑧は今回の考察の対象にしなかった。

- ①<一方的行為の向かう対象>を表すもの  
例 ~に自首する／~に投書する／~に求婚する など
- ②<態度の向かう対象>を表すもの  
例 ~に反対する／~に抵抗する／~に同情する など
- ③<移動の帰着点>を表すもの  
例 ~に移民する／~に加入する／~に出席する など
- ④<存在の場所>を表すもの  
例 ~に居住する／~に隠居する／~に生息する など
- ⑤<変化の結果>を表すもの  
例 ~に凝結する／~に変色する／~に分裂する など
- ⑥<成就判断の基準>を表すもの  
例 ~に合格する／~に成功する／~に落選する など
- ⑦<心的動作の起因>を表すもの  
例 ~に感動する／~に激怒する／~に満足する など
- ⑧<関係>を表すもの

例 ～に所属する／～に一致する／～に酷似する など

⑨その他：上記の分類に当てはまらないもの

例 ～に影響する／～に違反する／～に精通する など

アンケートは上記の7つの分類ごとに出題し、日本語にも中国語にも存在する二格漢語動詞計37語を調査の対象とした。アンケートは以下のような穴埋めの選択式にて出題した。

(3)次の文の\_\_\_\_\_に「が、を、に、で」から一つ選んで書いてください。

・私は来月スピーチコンテスト\_\_\_\_\_参加する。

アンケートで用いた問題はなるべく平易なものにするよう努め、外来語や文化的な知識がないと理解しにくい単語には中国語訳を付した。アンケートの回答時間は20分を目安としたが、特に制限時間は設けなかった。

## 4. 調査の結果と考察

### 4.1 意味役割別の平均正答率と平均誤答率

まず、二格漢語動詞の7つの意味役割別の平均正答率と平均誤答率を見る。その結果を【表1】に示す。【表1】は「二格をヲ格に間違えた割合」が高い順に並べてある。

【表1】意味役割別の平均正答率及び平均誤答率

	平均正答率 (に)	平均誤答率				合計
		を	が	で	小計	
態度の向かう対象 (8語)	47.4%	43.5%	6.2%	2.9%	52.6%	100%
その他 (4語)	54.6%	33.8%	9.5%	2.1%	45.4%	100%
移動の帰着点 (8語)	76.5%	16.5%	2.4%	4.6%	23.5%	100%
変化の結果 (5語)	75.5%	13.3%	6.4%	4.8%	24.5%	100%
成就判断の基準 (5語)	44.2%	13.2%	28.6%	14.0%	55.8%	100%
一方的行為の向かう対象 (3語)	83.2%	11.9%	2.0%	2.9%	16.8%	100%
存在の場所 (4語)	45.8%	3.0%	3.3%	47.8%	54.2%	100%

このアンケート結果から、二格をヲ格に間違えた割合は、＜態度の向かう対象＞が43.5%で一番高く、以下【表1】の順であった。

一方、平均誤答率を見ると、<成就判断の基準>が55.8%で一番高く、続いて<存在の場所>の54.2%、<態度の向かう対象>の52.6%の順に高い比率を占めている。このうち、<成就判断の基準>はヲ格よりガ格やデ格に間違えた割合が大きく、<存在の場所>の場合はヲ格よりデ格に間違えた割合が大きいことが分かる。

以下、意味役割別に具体的にみる。

#### 4.2 <一方的行為の向かう対象>

このタイプの動詞は、動作主体が人や、組織、機関などに向けて一方的に行為を投げかける意味を持つ。この場合、主体は静止している対象に一方的に行為を行うという点が特徴的である。アンケート項目は次の3つである。

- (4) 犯人が警察に自首する。
- (5) 親会社の子会社に出資する。
- (6) 彼は給料の大半を外国語の勉強に投資している。

まず、アンケート結果を以下の【表2】に示す。アンケート結果は「二格をヲ格に間違えた比率」の高い順に並べてある。(以下同様)

【表2】<一方的行為の向かう対象>

	正答 (に)		誤 答								合 計	
			を		が		で		小 計			
投資する	127 <sup>2)</sup>	73.4%	31	17.9%	5	2.9%	10	5.8%	46	26.6%	173	100%
出資する	146	84.4%	23	13.3%	3	1.7%	1	0.6%	27	15.6%	173	100%
自首する	159	91.9%	8	4.6%	2	1.2%	4	2.3%	14	8.1%	173	100%
平均	144	83.2%	20.7	11.9%	3.3	2.0%	5	2.9%	29	16.8%	173	100%

アンケートの結果を見ると、いずれも正答率が高いことが観察できる。誤答の内訳を見てみるとヲ格を選んだ割合がガ格やデ格に比べて高いことが分かる。このタイプに対応する中国語構文は以下の(4)' (5)' (6)' のようにいずれも“向”、“给”や“到”という介詞を用いて表現する。

- (4)' 犯人向警察自首。
- (5)' 母公司(向/给)子公司出資。
- (6)' 他把工资的大半投资到外语学习上。

この場合、中国語の“向”、“给”や“到”は日本語の「～に向けて」の意味

を表わすため、二格が選ばれやすかったのではないかと推測できる。

#### 4. 3 <態度の向かう対象>

このタイプの動詞の特徴は、主体の対象に対する態度、すなわち主体が対象に対して「どう思っているのか」という気持ちを表わすことにある。アンケート項目は次の8つである。

- (7) 父は姉の結婚に反対した。
- (8) 世界チャンピオンに挑戦する。
- (9) 新入社員が上司に抵抗した。
- (10) 禁煙に賛成する人が年々増えている。
- (11) みんなは彼の立場に同情している。
- (12) 過半数の人が彼の提案に同意した。
- (13) 他人の私生活に干渉してはいけない。
- (14) アンケートに協力してくれたみなさんに感謝する。

アンケートの結果を【表3】に示す。

【表3】<態度の向かう対象>

	正答 (に)		誤 答						小 計		合 計	
			を		が		で					
	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率	数	率
干渉する	51	29.5%	110	63.6%	11	6.4%	1	0.6%	122	70.5%	173	100%
同情する	48	27.7%	90	52.0%	13	7.5%	22	12.7%	125	72.3%	173	100%
同意する	75	43.4%	85	49.1%	12	6.9%	1	0.6%	98	56.6%	173	100%
抵抗する	95	54.9%	72	41.6%	3	1.7%	3	1.7%	78	45.1%	173	100%
挑戦する	96	55.5%	69	39.9%	6	3.5%	2	1.2%	77	44.5%	173	100%
賛成する	86	49.7%	68	39.3%	15	8.7%	4	2.3%	87	50.3%	173	100%
反対する	107	62.2%	59	34.3%	6	3.5%	0	0%	65	37.8%	172	100%
感謝する	101	58.7%	49	28.5%	20	11.6%	2	1.2%	71	41.3%	172	100%
平均	82	47.7%	75	43.5%	11	6.2%	4	2.9%	90	52.3%	173	100%

アンケートの結果、正答率は上の<一方的行為の向かう対象>に比べて低いことが観察される。また、その誤答がヲ格に集中していることが分かる。

<態度の向かう対象>を表すニ格構文は中国語では以下のように [SVN] という他動詞構文をとるものが多い。

(12) 过半数的人同意他的建议。

(13) 不得干涉他人的私生活。

一方、「挑戦」は中国語で [S “向” NV] 構文にも [SVN] 構文にも対応する。

(8) a. 他向世界冠军挑战。

b. 他挑战世界冠军。

この「挑戦」の例を見ると二格名詞が<一方的行為の向かう対象>の場合と<態度の向かう対象>の場合には意味的にはっきりした境界線が引けず、意味的に連続していることが分かる。したがって、「挑戦する」を(8a)′のように考えた人は二格を選び、(8b)′のように考えた人はヲ格を選んだと考えられる。

同様に、「賛成する」「反対する」「感謝する」の解答にヲ格を選択した割合が<一方的行為の向かう対象>の動詞より大きいのも、中国語の意味的・構文的特徴から解釈することができる。つまり、これらの動詞は(7a)′(10a)′のように中国語では[SVN]構文で用いられる一方、(7b)′(10b)′「対～表示」を用いて表わすこともできる。中国語の「対～」は日本語の「～に対して」の意味を表わすため、二格が選ばれやすかったと考えられる。

(7) a. 父亲反对姐姐的婚事。

b. 父亲对姐姐的婚事表示反对。

(10) a. 赞成禁烟的人年年增加。

b. 对禁烟表示赞成的人年年增加。

これらに対し、「干涉する」に対応する中国語の構文は[SVN]構文のみで、上記の動詞のような“向”や“对”などの介詞を伴うことができない。そのため、「干涉する」は二格を選んだ割合が低いと考えられる。

#### 4.4 <移動の帰着点>

このタイプの動詞は、動作主の動作・行為によって、主体の位置や資格に変化が生じることを意味する。アンケート項目は以下の3つである。

(15) 彼は10年前にカナダに移民した。

(16) 彼は敵陣に潜入したが、あいにく捕まえられた。

(17) 爆弾は敵陣に命中した。

(18) 中国は2001年にWTOに加入した。

(19) 彼は半年前にスポーツクラブに入会した。

(20) 姉がピアノのコンクールに応募する。

(21) 田中会長は会社の忘年会に出席した。

② 私は12月スピーチコンテストに参加する。  
アンケート結果を【表4】に示す。

【表4】＜移動の帰着点＞

	誤答															
	正答(に)		を						が		で		小計		合計	
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合		
参加する	104	60.1%	62	35.8%	7	4.0%	0	0%	69	39.9%	173	100%				
命中する	82	47.4%	58	33.5%	9	5.2%	24	13.9%	91	52.6%	173	100%				
応募する	116	67.1%	45	26.0%	1	0.6%	11	6.4%	57	32.9%	173	100%				
出席する	122	70.5%	42	24.3%	3	1.7%	6	3.5%	51	29.5%	173	100%				
加入する	139	80.3%	29	16.8%	2	1.2%	3	1.7%	34	19.7%	173	100%				
入会する	146	84.4%	20	11.6%	3	1.7%	4	2.3%	27	15.6%	173	100%				
移民する	147	87.0%	18	10.7%	1	0.6%	3	1.8%	22	13.0%	169	100%				
潜入する	144	83.2%	17	9.8%	6	3.5%	6	3.5%	29	16.8%	173	100%				
平均	125	72.5%	36	21.1%	4	2.3%	7	4.1%	48	27.5%	173	100%				

「敵陣に潜入する」「カナダに移民する」「敵陣に命中する」の二格名詞「カナダ」や「敵陣」は具体的な場所名詞であるが、他の二格名詞「WTO」「スポーツクラブ」「コンクール」「忘年会」「スピーチコンテスト」は、抽象的な場所名詞と考えられる。いずれも＜移動の帰着点＞を表すという点で共通している。

アンケートの結果から全体的に抽象的な移動を表す場合のほうが具体的な移動を表わす場合より誤答率が高いことが分かる。このうち「命中する」は具体的な移動を表わすのにヲ格を選択した割合が相対的に高いことが観察できる。

「加入する」「入会する」「移民する」「潜入する」はヲ格を選んだ割合がいずれも小さく、20%以下に収まっている。その理由として、これらの動詞には「入(る)」という意味合いが含まれるため、自動詞と判断しやすく二格を選びやすかったと考えられる。<sup>3)</sup> また、対応する中国語の構文の特徴から考えることもできる。つまり、これらの動詞に対応する中国語の構文は(15)'や(18)'のように[SVN]のみでなく、[SV“到”N] 或いは[S“到”NV]で表わすことができる。

- (15)' a. 他移民加拿大。  
b. 他移民到加拿大。  
c. 他到加拿大移民。



- (18) a. 中国加入了WTO。  
 b. 中国加入到WTO。  
 c. \*中国到WTO加入

中国語の“到”は、日本語で「帰着点」を表わし二格に対応するため二格が選ばれやすかったと考えられる。

それに対し、「参加する」「命中する」「応募する」「出席する」の解答にヲ格を選んだ割合が相対的に高いのは、中国語では(17) (20) (21) (22) のように [SVN] の他動詞構文しかとらないため、母語の影響を受けてヲ格にした可能性が考えられる。

- (17) 炮弹命中敌阵。  
 (20) 姐姐应募钢琴竞赛会。  
 (21) 田中会长出席公司的忘年会。  
 (22) 我参加演讲比赛。

#### 4.5 <存在の場所>

このタイプの動詞は、動作ではなく存在の場所を表わしている。アンケート項目は以下の5つである。

- (23) 彼は仕事をやめて田舎に隠居した。  
 (24) この魚は深海に生息している。  
 (25) この植物はアジアに広く分布している。  
 (26) 友人は三年前から日本に在留している。

アンケート結果を【表5】に示す。

【表5】<存在の場所>

	正答 (に)		誤 答						小 計		合 計	
			を		が		で					
隠居する	83	48.0%	11	6.4%	3	1.7%	76	43.9%	90	52.0%	173	100%
分布する	45	26.0%	5	2.9%	15	8.7%	108	62.4%	128	74.0%	173	100%
生息する	64	37.0%	4	2.3%	4	2.3%	101	58.4%	109	63.0%	173	100%
在留する	125	72.3%	1	0.6%	1	0.6%	46	26.6%	48	27.7%	173	100%
平均	79	45.8%	5	3.0%	6	3.2%	83	47.8%	94	54.2%	173	100%

アンケートの結果からヲ格を選んだ割合は非常に小さく、テ格を選んだ割

合が大きいことが分かる。＜存在の場所＞を表す二格はヲ格ではなく、テ格との使い分けが問題になることが分かる。

このタイプの動詞は(23)'のように中国語の [SV “在” N] 或いは [S “在” NV] 或いは [SVN] に対応する。

- (23)' a. 他隱居在乡下。
- b. 他在乡下隱居。
- c. 他隱居乡下。

日本語の「隱居する」は二格をとって「存在」の意味を表わす。これに対し、中国語で「在」が(23a)'のように動詞の後ろに置かれると「存在」の意味を表わし、(23b)'のように動詞の前に置かれると「動作・行為の範囲」を表す。つまり、「隱居する」は中国語で「存在」と「動作・行為の範囲」の両方の意味を表わしている。そのため、(23a)'を考えた人は二格を選択し、(23b)'を考えた人はテ格を選んだと考えられる。なお、中国語には(23c)'のような他動詞構文の言い方もあるが、(23a)' (23b)'ほど使われないため、ヲ格を選んだ割合が小さいと考えられる。

#### 4. 6 <変化の結果>

このタイプの動詞の特徴は、動作ではなく主体の変化を意味し、その変化した結果を二格で示すことにある。アンケート項目は以下の5つである。

- (27) 緑茶は長時間飲まないと黄色に変色する
- (28) 戦争で国が二つに分裂した。
- (29) 課長は今年部長に昇任した。
- (30) 彼はバレーボールの監督に留任した。
- (31) 5年会っていなかったら彼は立派な青年に成長していた。

アンケート結果を【表6】に示す。

【表 6】 &lt;変化の結果&gt;

	正答 (に)		誤 答								合 計	
			を		が		で		小 計			
留任する	102	59.0%	44	25.4%	6	3.5%	21	12.1%	71	41.0%	173	100%
変色する	142	82.1%	26	15.0%	3	1.7%	2	1.2%	31	17.9%	173	100%
昇任する	141	81.5%	16	9.2%	15	8.7%	1	0.6%	32	18.5%	173	100%
分裂する	145	83.8%	15	8.7%	9	5.2%	4	2.3%	28	16.2%	173	100%
成長する	123	71.1%	14	8.1%	22	12.7%	14	8.1%	50	28.9%	173	100%
平均	131	75.5%	23	13.3%	11	6.4%	8	4.8%	42	24.5%	173	100%

このタイプの二格構文も正答率が高い。その理由として、動詞の構文的特点が考えられる。このタイプに対応する中国語構文は⑳’ ㉑’ ㉒’ のように [SV] 或いは [SV “成/为/成为” N] になる。

- ㉑’ a. 绿茶变色了。  
 b. 绿茶变成黄色。  
 ㉒’ a. 由于战争国家分裂了。  
 b. 由于战争国家分裂 (成/为/成为) 两个。  
 ㉒’ a. 科长升任了。  
 b. 科长升任为部长。

つまり、これらの<変化の結果>を表す二格構文に対応する中国語の構文は、[SV] 或いは動詞の後ろに“成/为/成为”という結果を表す介詞を用いて表わす。“成/为/成为”は日本語で「～になる」の意味を表わすため二格が選ばれやすいと考えられる。

#### 4. 7 <成就判断の基準>

このタイプの動詞は、ある事柄を成し遂げたか否かを表わすもので、動作ではなく状態性を帯びている。二格名詞はその成し遂げたかどうかを判断する基準を表わしている。アンケート項目は以下の5つである。

- ㉓ 弟は大学の入学試験に合格した。  
 ㉔ 中国は1970年に初の人工衛星の打ち上げに成功した。  
 ㉕ 自民党は今度の衆議院選挙に勝利した。  
 ㉖ 彼はまた実験に失敗した。  
 ㉗ 彼は選挙に落選した。

このアンケート結果を【表7】に示す。

【表7】＜成就判断の基準＞

	正答 (に)		誤 答						小 計		合 計	
			を		が		で					
失敗する	63	36.4%	39	22.5%	66	38.2%	5	2.9%	110	63.6%	173	100%
成功する	59	34.1%	23	13.3%	79	45.7%	12	6.9%	114	65.9%	173	100%
落選する	86	49.7%	21	12.1%	16	9.2%	50	28.9%	87	50.3%	173	100%
合格する	104	60.1%	19	11.0%	46	26.6%	4	2.3%	69	39.9%	173	100%
勝利する	70	40.5%	12	6.9%	40	23.1%	51	29.5%	103	59.5%	173	100%
平均	76	44.2%	23	13.2%	49	28.6%	24	14.0%	97	55.8%	173	100%

アンケート結果から、「合格する」の正答率が60.1%で比較的高いものの、全体的に正答率はさほど高くないことが分かる。誤答の中身を観察してみると、ヲ格を選んだ割合は他の意味役割の場合に比べて小さく、「合格する」「失敗する」「成功する」はガ格を選んだ割合が、「落選する」「勝利する」はテ格を選んだ割合が比較的高い。

このタイプに対応する中国語の構文は他の意味役割と違って、「合格する」「成功する」「失敗する」のように日本語の二格名詞に相当する成分（動詞の前にくるので「目的語」と言えない）が動詞の前に現れ、[SNV] という構文をとるものもあれば、「勝利する」「落選する」のように [SV] 或いは [S “在N中” V] という構文をとるものもある。

まず、「合格する」「成功する」「失敗する」の場合、(32)′ (33)′ (35)′ のように [SNV] という構文をとるため、被験者はガ格を選びやすかったと考えられる。

(32)′ 弟弟大学考试合格了。

(33)′ 中国在1970年首次人造卫星发射成功了。

(35)′ 他实验又失败了。

一方、「勝利する」「落選する」を見てみると、(34)′ (36)′ のように二通りの表わし方があるが、(34b)′ (36b)′ のように「選挙」などの具体的な「基準」を用いる場合は“在N中”という形で表わす。“在N中”は日本語で「～で」に相当するためテ格が選ばれやすかったと考えられる。

(34)′ a. 自民党胜利了。

b. 自民党在此次众议院选举中胜利了。

- ⑶' a. 他落选了。  
b. 他在选举中落选了。

#### 4. 8 その他

上記の6種類の分類に入らない二格漢語動詞のうち、先行研究で誤用が起こりやすいものを4つ取り上げて調査した。

- ⑶7 多くの人がウィルスに感染した。  
⑶8 気候が農作物の成長に影響する。  
⑶9 彼は交通ルールに違反して減点された。  
⑶0 父は日本歴史に精通している。

まず、アンケート結果を以下の【表8】に示す。

【表8】 その他

	正答 (に)		誤 答							合 計		
			を		が		で		小 計			
感染する	56	32.4%	97	56.1%	12	6.9%	8	4.6%	117	67.6%	173	100%
精通する	76	43.9%	54	31.2%	39	22.5%	4	2.3%	97	56.1%	173	100%
影響する	121	69.9%	43	24.9%	8	4.6%	1	0.6%	52	30.1%	173	100%
違反する	125	72.3%	40	23.1%	7	4.0%	1	0.6%	48	27.7%	173	100%
平均	95	54.6%	59	33.8%	17	9.5%	3.5	2.1%	79	45.4%	173	100%

アンケートの結果、ヲ格を選んだ割合は「感染する」が56.1%でもっとも高く、「精通する」が31.2%、「影響する」が24.9%、「違反する」が23.1%であった。これらの動詞は⑶7' ~⑶0' のように中国語の [SVN] 構文に対応するため、中国語の構文的影響の影響を受けてヲ格を選択したと推測できる。

- ⑶7' 许多人感染了病毒。  
⑶8' 气候影响农作物的成长。  
⑶9' 他违反了交通规则。  
⑶0' 父亲精通日本历史。

このうち、「影響する」「精通する」「違反する」は、中国語の他の [SVN] 構文に比べてヲ格が選ばれた割合がさほど大きくない。その理由については今後検討する必要がある。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、漢語動詞の二格構文の誤用について中国人日本語学習者を対象に行ったアンケート調査の結果について考察を行った。

その結果、二格をヲ格に間違えた割合が大きいものから順にく態度の向かう対象> (例: ~に干渉する/ ~に反対する)、「その他」(例: ~に感染する/ ~に精通する/ ~に影響する/ ~に違反する)、<移動の帰着点> (例: ~に移民する/ ~に加入する)、<変化の結果> (例: ~に変色する/ ~に分裂する)、<成就判断の基準> (例: ~に失敗する/ ~に合格する)、<一方的行為の対象> (例: ~に自首する/ ~に投資する)、<存在の場所> (例: ~に隠居する/ ~に分布する)であることが明らかとなった。一方、<成就判断の基準>の場合は、二格をヲ格よりガ格やテ格に間違えた割合が大きく、<存在の場所>の場合は、ヲ格よりテ格に間違えたものが多いことが分かった。

従来、漢語動詞の二格構文において、中国人日本語学習者が二格をヲ格に間違える理由として、対応する中国語が[SVN]という他動詞構文をとるためであると説明されてきた。しかし、本研究の調査の結果、同じ[SVN]構文でもヲ格を選択しやすい場合とそうでない場合があることが明らかとなった。例えば、「干渉する」のように<態度の向かう対象>の場合はヲ格を選択しやすく、「隠居する」のように<存在の場所>の場合はヲ格を選択しにくい。また、対応する中国語が[SVN]構文だけでなく、“向”や“在”などの介詞を用いる構文でも言い表せる場合には、その介詞に対応する日本語の格助詞が選択される傾向があることも明らかとなった。<sup>4)</sup>

本稿では、二格構文の分類のうち「~に感動する」「~に激怒する」のような<心的動作の起因>及び「~に所属する」「~に一致する」のような<関係>を表す意味役割について考察できなかったが、これについては今後の課題にする。また、今後ヲ格を使うべきところを二格に間違える例(「先生に(→)尊敬する」など)についても考察するつもりである。

### 注

- 1) 比較のため、ヲ格をとる漢語動詞についてもその意味役割ごとに調査をした。これについては別稿で論じる予定である。
- 2) 「127」は被験者173名中「に」と解答した人数が127名いたことを示す。「73.4%」はその割合を示す。(以下同様)

- 3) 「加入する」「入会する」「移民する」「潜入する」が「入る」の意味をもつ  
のに対し、「参加する」「応募する」「出席する」は「入る」より「出る」の  
意味合いが伺える。つまり、「参加する」は「出場する」の意味として、  
「応募する」は「出願する」の意味として捉えられる。この点については  
今後考察する。
- 4) 今回調査した37語の二格漢語動詞について「二格を選んだ割合が大きい順  
に並べたもの」及び「ヲ格を選んだ割合が大きい順に並べたもの」をそれ  
ぞれ【表9】【表10】に示しておく。

【表9】二格の選択率の高い動詞から降順

動詞	に	を	が	で	合計
1 自首する	91.9%	4.6%	1.2%	2.3%	100%
2 移民する	87.0%	10.7%	0.6%	1.8%	100%
3 入会する	84.4%	11.6%	1.7%	2.3%	100%
4 出資する	84.4%	13.3%	1.7%	0.6%	100%
5 分裂する	83.8%	8.7%	5.2%	2.3%	100%
6 潜入する	83.2%	9.8%	3.5%	3.5%	100%
7 変色する	82.1%	15.0%	1.7%	1.2%	100%
8 昇任する	81.5%	9.2%	8.7%	0.6%	100%
9 加入する	80.3%	16.8%	1.2%	1.7%	100%
10 投資する	73.4%	17.9%	2.9%	5.8%	100%
11 在留する	72.3%	0.6%	0.6%	26.6%	100%
12 違反する	72.3%	23.1%	4.0%	0.6%	100%
13 成長する	71.1%	8.1%	12.7%	8.1%	100%
14 出席する	70.5%	24.3%	1.7%	3.5%	100%
15 影響する	69.9%	24.9%	4.6%	0.6%	100%
16 応募する	67.1%	26.0%	0.6%	6.4%	100%
17 反対する	62.2%	34.3%	3.5%	0.0%	100%
18 合格する	60.1%	11.0%	26.6%	2.3%	100%
19 参加する	60.1%	35.8%	4.0%	0.0%	100%
20 留任する	59.0%	25.4%	3.5%	12.1%	100%
21 感謝する	58.7%	28.5%	11.6%	1.2%	100%
22 挑戦する	55.5%	39.9%	3.5%	1.2%	100%
23 抵抗する	54.9%	41.6%	1.7%	1.7%	100%
24 落選する	49.7%	12.1%	9.2%	28.9%	100%
25 賛成する	49.7%	39.3%	8.7%	2.3%	100%
26 隠居する	48.0%	6.4%	1.7%	43.9%	100%
27 命中する	47.4%	33.5%	5.2%	16.2%	100%
28 精通する	43.9%	31.2%	22.5%	2.3%	100%
29 同意する	43.4%	49.1%	6.9%	0.6%	100%
30 勝利する	40.5%	6.9%	23.1%	29.5%	100%
31 生息する	37.0%	2.3%	2.3%	58.4%	100%
32 失敗する	36.4%	22.5%	38.2%	2.9%	100%
33 成功する	34.1%	13.3%	45.7%	6.9%	100%
34 感染する	32.4%	56.1%	6.9%	4.6%	100%
35 干渉する	29.5%	63.6%	6.4%	0.6%	100%
36 同情する	27.7%	52.0%	7.5%	12.7%	100%
37 分布する	26.0%	2.9%	8.7%	62.4%	100%

【表10】ヲ格の選択率の高い動詞から降順

動詞	を	に	が	で	合計
1 干渉する	63.6%	29.5%	6.4%	0.6%	100%
2 感染する	56.1%	32.4%	6.9%	4.6%	100%
3 同情する	52.0%	27.7%	7.5%	12.7%	100%
4 同意する	49.1%	43.4%	6.9%	0.6%	100%
5 抵抗する	41.6%	54.9%	1.7%	1.7%	100%
6 挑戦する	39.9%	55.5%	3.5%	1.2%	100%
7 賛成する	39.3%	49.7%	8.7%	2.3%	100%
8 参加する	35.8%	60.1%	4.0%	0.0%	100%
9 反対する	34.3%	62.2%	3.5%	0.0%	100%
10 命中する	33.5%	47.4%	5.2%	16.2%	100%
11 精通する	31.2%	43.9%	22.5%	2.3%	100%
12 感謝する	28.5%	58.7%	11.6%	1.2%	100%
13 応募する	26.0%	67.1%	0.6%	6.4%	100%
14 留任する	25.4%	59.0%	3.5%	12.1%	100%
15 影響する	24.9%	69.9%	4.6%	0.6%	100%
16 出席する	24.3%	70.5%	1.7%	3.5%	100%
17 違反する	23.1%	72.3%	4.0%	0.6%	100%
18 失敗する	22.5%	36.4%	38.2%	2.9%	100%
19 投資する	17.9%	73.4%	2.9%	5.8%	100%
20 加入する	16.8%	80.3%	1.2%	1.7%	100%
21 変色する	15.0%	82.1%	1.7%	1.2%	100%
22 出資する	13.3%	84.4%	1.7%	0.6%	100%
23 成功する	13.3%	34.1%	45.7%	6.9%	100%
24 落選する	12.1%	49.7%	9.2%	28.9%	100%
25 入会する	11.6%	84.4%	1.7%	2.3%	100%
26 合格する	11.0%	60.1%	26.6%	2.3%	100%
27 移民する	10.7%	87.0%	0.6%	1.8%	100%
28 潜入する	9.8%	83.2%	3.5%	3.5%	100%
29 昇任する	9.2%	81.5%	8.7%	0.6%	100%
30 分裂する	8.7%	83.8%	5.2%	2.3%	100%
31 成長する	8.1%	71.1%	12.7%	8.1%	100%
32 勝利する	6.9%	40.5%	23.1%	29.5%	100%
33 隠居する	6.4%	48.0%	1.7%	43.9%	100%
34 自首する	4.6%	91.9%	1.2%	2.3%	100%
35 分布する	2.9%	26.0%	8.7%	62.4%	100%
36 生息する	2.3%	37.0%	2.3%	58.4%	100%
37 在留する	0.6%	72.3%	0.6%	26.6%	100%

## 参考文献

- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 生田 守・久保田美子（1997）「上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点-助詞テストによる横断的研究から-」『日本語国際センター紀要』第7号，pp.17-34
- 国立国語研究所（2001）『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver.2』CD-ROM版，国立国語研究所，研究代表者 宇佐美洋
- 杉本妙子（1997）「格助詞「を」をめぐる誤用：分類と分析」『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』第1号，pp.31-50
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則（1987）『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版

補足：本論文は、2007年（2006年度）に東京外国語大学に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。